

国際交流学生サークル活動への教育的サポート： 「九州大学国際親善会」の活動と会への支援

高松, 里
九州大学留学生センター : 助教授

<https://doi.org/10.15017/4776950>

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 15, pp.67-74, 2007-02. 九州大学留学生センター
バージョン :
権利関係 :

国際交流学生サークル活動への教育的サポート

「九州大学国際親善会」の活動と会への支援

高 松 里*

要 旨

本稿は、1961年に発足した国際交流学生サークルである「九州大学国際親善会」の現在の活動を紹介するものである。ここ数年、九州大学国際親善会の活動は活性化し、多方面にわたって留学生との交流活動を展開している。このような活動に対して、大学の教職員はどのような教育的サポートをすべきなのだろうか。ここでは(1)新しい活動の提案、(2)学生と大学を繋ぐ役割、(3)活動拠点および備品の確保、(4)交流の機会を提供する、という点について検討を行った。

I. はじめに

日本の大学で学ぶ外国人留学生は増え続けているが(2005年5月現在、121,812人)、それに伴い、各大学には留学生の自治的組織である「留学生会」が組織されてきた。九州大学にも、全留学生(2006年5月現在、1,141人)を代表する「九州大学留学生会」、イスラム教の留学生による「九州大学ムスリム学生会」、国別の留学生会である「中国留学生会」「韓国留学生会」などの団体がある。

また、主として日本人学生による「国際交流学生サークル」も多く大学に存在する。九州大学の場合は、「九州大学国際親善会(以下、九親会と略す)」というサークルが1961年に発足し、45年たった現在も活発な活動を行っている。

筆者は、九親会の顧問として1989年より彼らの活動を支援してきた。1989年ころの九親会は、活動範囲が狭く、何をして良いかわからない、手探り状態であるように見えた。その後、彼らが新たに始めた活動や、筆者が提案したものが加わり、多彩な活動を展開し始めた。この

ようなサークルが活性化することにより、留学生が日本で適応するのに役立つことはもちろん、サークルメンバー自身も学び変化していく。これは、九親会にとっても、留学生にとっても、国際理解教育として重要な活動であると思われる。

しかし、福岡近郊の大学の国際交流学生サークルの中には解散してしまったものもある。それを見ていると、ただ彼らが自主的に活動を展開すれば良い、というものではないように思える。かれらの活動が教育の一環であるとするれば、大学教職員が積極的に彼らの活動を支持し、協力していくことは意味のあることである。

このような国際交流学生サークルについての情報は、各大学のインターネット等で見るができるが、多くのサークルは消長を繰り返している。強力なリーダーが現われると活動が盛り上がり、リーダーがサークルの第一線から退くと会も停滞あるいは解散する、ということが多い。

国際交流学生サークルについての研究は、箕浦(1998)による研究があるものの、他には見

*九州大学留学生センター助教授

あたらない。

本稿では、この九親会の活動を詳しく紹介したい。また、筆者ら大学教職員がこれらのサークルに対してどのような教育的サポートが可能かについての考察も行いたい。

II. 九州大学国際親善会の活動

九親会は、1961年インドネシア留学生の発案により、「九州大学親善会」として発足し、1964年に「九州大学国際親善会」に改称された。大学や学部への認定サークルとしての登録は行っていない。現在でも留学生センター長を部長とする特殊な形態を取っている。

実際の活動は、他のサークルと同じで、活動費用は会員からの会費でまかなっている。留学生センターの教員が顧問となっており、留学生センターとは常に連絡を取り合いながら活動を行っている。

(1) 組織の概要

- ・名称：九州大学国際親善会
(KUIFA = Kyushu University International Friendship Association)
- ・発足年：1961年
- ・会の目的：本会は会員の民主的自治により本大学の外国人留学生等の交流を通して、国際親善に貢献することを目的とする（「九親会会則」より）
- ・役員：会則によれば、会長は留学生センター長となっており、学生のリーダーは「委員長」と呼ばれている。その他の会役職として、副委員長（2名）、会計・会計補佐となっている。
- ・担当：「留学生受け入れ」「広報」「コーヒーアワー」「宿舎・コンパ」「受験生案内」「イ

ンターリンク」「学祭」「お悩み解決隊」「チューター選考」「西銀財団」の各担当がある。

- ・部室：六本松キャンパス（旧教養部）の「留学生控え室」、および箱崎キャンパスの留学生センター分室1階の1室（九州大学留学生会と共用）を活動拠点としている。
- ・部員：大学院生を含めて40数名。そのうち留学生は約10名。
- ・会費：半期1,500円
- ・顧問：留学生センター指導部門の教員（白土、高松）
- ・ホームページ：<http://kuifa.nomaki.jp/>

(2) 活動内容

九親会の特徴的な活動について以下紹介したい。

これらの活動以外に、他のサークルと同様に、新歓ガイダンス、新歓コンパ、ハイキング、キャンプなどを行っている。また総会等の定例会議もある（詳しくは会のホームページを参照のこと）。不定期行事としては、留学生宿舎でのバーベキューパーティ（2005年は100名以上の参加があった）などもあり、適宜、柔軟に活動を行っている。

受験生案内（2月）

九州大学では、毎年2月、私費留学生（学部）のための特別入試が行われ、全国から受験者が集まる。九親会は、他の地方から来る受験生のために、ホテルの斡旋、試験会場までの案内、歓迎昼食会、などを行っている。2006年に案内をした受験生は約20人だった。

具体的には、大学が受験票を送る際に、九親会からの案内文を同封してもらう。そこには、案内を希望するかどうか、希望する場合にはどのような交通手段で何時に福岡に到着するか、などの質問項目がある。希望した学生から回答

が届くと、その時間に合わせて、博多駅や福岡空港まで出迎えに行く。受験当日朝はまたホテルまで迎えに行き、試験会場まで案内する。初日の試験（試験は2日間にわたって行われる）が終わった後、昼食会を開き交流する、という形になっている。

このように、大学に入学する前の受験生（多くは就学生）に対してサービスを行う活動は、他大学で行われているという話を聞いたことがない。「案内をしてもらって感動した。九大に決めたのはそのためです」と言っていた留学生もいた。

新入留学生受け入れ（4月と10月）

九州大学は留学生専用宿舎として、2つの会館を持っている。そのうち、「九州大学国際交流会館（香椎浜）」において、1993年4月から新入留学生のサポートを開始した。支援を提案したのは筆者であり、実際に行動したのは九親会の学生たちである。

当初は、「日本語研修コース」の学生のみを対象とした。このコースは半年間の日本語集中コースであり、終了後は大学院に進む。入学時点ではほとんど日本語が話せないため、最初の日本での生活をスムーズに開始できるように支援することが目的だった。20名前後の学生が入学してくるのだが、その学生達の来館時間に合わせて支援チームを組んだ。

その後、支援の対象は徐々に広がり、現在では全入寮生を支援している。4月と10月の2回だが、毎回100組（家族も多い）以上の留学生に対してサービスを行っている。

具体的な活動内容としては、4月と10月の最初の1週間程度、シフトを組み、毎日朝から夕方まで5～10名程度の九親会学生が待機する。事務室横にカウンターを作り、タクシー等で到着する新入生の荷物をまずカウンターまで運ぶ。

入居手続きの書類書きを手伝い、インターネットの使い方やゴミの捨て方について説明する。またオリエンテーション等の行事についての情報を提供する。

事務手続きが終われば、荷物を持って部屋まで行く。留学生は巨大な荷物を持ってきていることが多いので、エレベーターのない4階や5階の部屋まで荷物を運び込むことは大変な労力があるので、それを手伝う。

新入留学生の多くは24時間を超える移動と時差により疲れ切っている。とりあえずの食べ物と飲み物および寝具を確保するため、留学生の希望があれば夕方にショッピングツアーを実施し、100円ショップやスーパーを回る。

また、2006年4月はちょうど桜が満開だったため、新しい行事として箱崎キャンパス内で花見を行った。50名近い参加者があり、賑やかだった。

コーヒーアワー（毎週）

1990年6月からスタート。毎週木曜日17：30開始、19：00終了。年末年始やお盆を除いて、ほぼ無休。筆者が提案し、九親会OBとボランティア（九州大学教職員留学生交流会、1990年発足、その後解散）で開始したものである。留学生と日本人学生・教職員が日常的に話ができる場を提供しようと考えた。会場は留学生センター（分室）1階の集会室。コーヒーとお菓子を用意し、会費は毎回100円。

当初は筆者が毎回お菓子などを用意していたが、徐々に九親会メンバーが役割を引き受けるようになった。現在では完全に九親会主催行事となっている。4月や10月の新入生受け入れ時期には会場が一杯になる（40人くらい）が、夏休みや冬休みには人数が減る。

2006年5月には、他の学内交流グループ Culture Cafe と共同で、別の場所で国際料理

会を行った。

Inter Link FUKUOKA

「Inter Link FUKUOKA」は、1997年に九親会・西南学院大学アジア学生友好の会・福岡大学国際交流クラブによって結成されたものである。毎年5月頃に1週間程度、シンガポール大学の学生を福岡に招き、ホームステイや大学訪問などを行うものである。また逆に8月頃には日本の学生がシンガポールを訪問するという交換プログラムである。

(財)福岡国際交流協会がバックアップをして始められた行事だったが、現在では学生が主体となってすべて行っている。その後、西南学院大学の会が解散したため、九州大学と福岡大学の2つの大学で運営されている。

九大祭 (11月)

毎年大学祭にレストランを出している。留学生に手伝ってもらいながら、餃子などを中心にアジア料理を作ることが多い。目の前で餃子を手作りするので、評判は良いようだ。九州大学はキャンパスが分散しているが、他キャンパスの留学生を誘ってまとめて連れてくることもある。

(3) 最近新たに開始された活動

お悩み解決隊 (ピア・サポート)

最初は「学生相談員」という名称の企画だった。2004年10月から12月まで試験的に開始。この時は、留学生センター分室の九親会室を会場にしたが、相談に来る留学生はいなかった。

そこで、2005年1月にメンバー4人が広島大学へ行き、「ピア・サポートルーム」を見学し、情報を集めてきた。

2005年3月に相談員研修会 (講師は高松)、4月から本格的に稼働。名称を「お悩み解決隊」に変更。場所は留学生センター本館の1階。公

共スペースに机を用意し、毎日12:15~12:45の間、シフトを組んで待機した。何人かの留学生が相談に訪れたが、まだ数は多くない。チラシなどを配布しているのだが、なかなか留学生に認知されず、そのため相談者が増えないことが問題である。

チューター幹旋

学部1年生のチューター選考を巡っては以前から問題となっていた。

文部科学省が監修している「留学生交流執務ハンドブック」によれば、チューターとは、「指導教員の指導の下に、留学生の学習・研究指導 (予習・復習の手伝い) を中心に、日本語指導、日常の世話 (学内外の案内、諸手続きのための官庁等への同行、買い物、宿舎探しの補助) について個人指導を行うものとする」と記述されている。

ところで、新入生にとって最もチューターが必要なのは4月である。履修の手引きを読みこなし、先輩などからの情報も加味して、どの授業を選択するか決めなくてはならない。また、チューターが同じクラスの学生であれば、最初のクラスコンパなどでも気を遣ってもらえるだろう。

しかし、チューターを捜すということは容易ではない。例えば、たまたま隣の席に座った学生に「すみませんが、私のチューターになってもらえないでしょうか？」と頼まなくてはならない。頼まれた側も「チューターって何？」と聞くことになる。そのため、4月にはチューターが見つからず、5月以降にようやく見つかるというケースが多く見られた。

そこで、留学生センター・学生サービス係・九親会の三者で会議を重ね、チューター幹旋を試みることになった。新入留学生に対しては、3月に入学手続きのために大学に来たときに、

留学生控え室でチューター制度について説明をした。また、留学生対象の履修登録説明会においても、チューター斡旋システムについて九親会学生が説明した。日本人学生に対しては、筆者が担当している「日本事情」授業やその他の関連授業の初日（オリエンテーション）に九親会学生も参加し、授業後にこのシステムについて説明した。4月中旬にも留学生控え室で説明会を実施した。

さらに入学式後の新入生オリエンテーションにおいて、「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門」（高松，2006）を配布したが、そこにもチューター募集について書いた。

申し込み書類としては、留学生向けに「チューターについて」（氏名等の基本情報、希望する性別など）を作成し配布した。日本人学生向けには「チューター希望者用応募書類」（氏名、学部、メールアドレス等の基本情報の他、どの国の留学生のチューターになりたいか、外国語能力、希望する性別などを記入）を作成。

その結果、2005年度は斡旋を希望する留学生は20名、チューターに応募した日本人は68名となり、選考を行った。

具体的な計画や申込書の作成、実際のマッチング作業はすべて九親会が行い、教職員がチェックした。

チューター斡旋の作業は、九親会の名前を周知する機会ともなり、2005年から新入会員がかなり増えた。

Ⅲ. 国際交流学生サークルへの教育的支援

九親会は元々、ボランティア団体というよりは、留学生と日本人の両方がメンバーとなる交流会だった。現在も活動は「留学生のため」に

行うというより、自分たちが楽しみながら結果的に留学生のためになると良い、と考えられている。「留学生のために」とばかり考えていると、義務が増え、活動が楽しくなくなる。

では、九親会のような国際交流学生サークルの目的は何だろうか？それは、留学生への支援という活動を通して、サークルメンバー自身で自分と異質なものに触れ、成長していくことである。彼らの積極性や自主性が最も発揮されるのは、やはり自分自身が楽しいと感じ、それによって何か新しく生まれてくるものがある時であろう。

そしてメンバーの多くも海外旅行をしたり、交換留学に出かけたりして、逆の立場を経験する。また戻ってきてから、海外で自分がしてもらって嬉しかったことを留学生にお返しすることになる。

筆者は顧問ではあるが、サークルはあくまで自主的なものであり、筆者が活動に口を出すことはない。彼ら自身の試行錯誤こそが大切である。しかし、メンバーはしばしば筆者の研究室を訪れ、活動についての意見や、会場使用などの許可を求めに来る。また、筆者の方からも、留学生の授業への日本人学生の派遣などを依頼することが多い。

教職員が、このような国際交流学生サークルに対して、どのような教育的なサポートをするべきなのだろうか。以下、その方法について述べてみたい。

(1) 新しい活動の提案

筆者が九親会の顧問として関わり始めた時期（1989年10月）に委員長であった空田陽史氏は、九親会機関誌「KUIFA(29・30合併号、1991年）」（現在は休刊中）において、「九州大学国際親善会は、今大きな危機を迎えている」とし、「教

養部の留学生控室からの九親会追出しの動き。留学生指導教官からの信頼の欠如。そして何より九親会員ひとりひとりの九親会への取り組みの積極的姿勢のなさ。九親会は明らかに存在そのものの大きな危機を迎えている」と書いている。この時期（1989年7月）に九親会は本部を教養部（現六本松キャンパス）から留学生センターのある箱崎キャンパスへ移転させることが決まった。移転が決まった後も、活動はまだ混沌としていた。

筆者から見ても、その頃の九親会は何をしているのかよくわからなかった。メンバー同士は仲が良さそうに見えたし、雰囲気も友好的だった。しかし、中核的な活動がなく、会の方針が定まっていない、という印象を受けた。

考えてみれば、学部学生を中心とした国際交流サークルは、1年生で入会した後、4年生になると就職活動が忙しくなるから、せいぜい3年間ほどしか活動ができない。3年間のうちに、留学生の現状やニーズを知り、また自分自身のコミュニケーション能力を高めなくてはならない。新しい企画を出し、それを実行に移すためにはあまりに時間が短いと言える。

大学の教職員は、留学生に対してどのような支援が必要なのかに関して、長年の蓄積を持っている。教職員の側から、新しい活動の発案をすることは可能である。

九親会の場合、「コーヒアワー」や「新入生受け入れ活動」は、教員である筆者が提案し、一緒に組み立てて行ったものである。行事が軌道に乗れば、徐々に九親会の自主的活動へと変わっていく。実際、コーヒアワーを始めたのが誰か、現在の九親会員はほとんど誰も知らないはずである。

また、「お悩み解決隊」は基本的に九親会が自発的に始めたものだが、筆者がピアサポート

という仕組みがあることを話し、また広島大学のピアサポート担当教員と連絡を取り見学の便宜を図った。

このように、留学生のニーズをサークルに伝え、それに対応した活動をどう作っていくのか、教職員も一緒に考えていくことが、サークルに対する教育的サポートの一つの方法である。

(2) 学生と大学を繋ぐ役割

国際交流学生サークルは、基本的に学生が主体となり自ら活動の責任を負うものである。しかし、実際に活動をしようとする時、教職員（顧問）の手助けがあればずっとスムーズに進む。

例えば、上述した「受験生案内」であるが、以前は九親会学生が事務に行き、受験生の名簿を見せてもらい、その住所を転記し、受験生全員に案内状を送っていた。しかし、個人情報保護の観点から、この方法は続けられないことが数年前にわかった。そこで、筆者も中に入り、話し合った結果、留学生の受験票を発送する際に、九親会からの「お知らせ」も同封させてもらう形を取った。大学からの発送物に同封する以上、顧問である教員が責任を取る、という形である。

また、「チューター斡旋」システムについても、何回にもわたって、学生サービス係事務1～2名、九親会7～8名、それに筆者が加わって話し合いが行われた。チューター斡旋は本来、大学が行うべきことであり、責任は大学側にある。しかし、同時に九親会学生がチューターのとりまとめ役となり、何か問題が起きた時に先輩としてアドバイスしてくれれば、このシステムは有効に働く。そこで、三者が協議する必要があった。

その他、イベントのために大学の会場を借り

る場合、顧問の印鑑が必要である。また、留学生宿舎においてイベントを行う場合、それが土日であっても、筆者が出かけていき会場の鍵を開け、また終了後に片付けを確認し、鍵を閉めるということもあった。

このように、学生サークルと大学間に立ち、両者のコミュニケーションを図ることが重要である。顧問的な存在を持たないサークルは、会場を借りること一つでも非常に手間取る。アクティブなメンバーがいればその時期はサークルも維持できるだろうが、長期にサークルを続ける場合、顧問の存在は大きいと言える。

(3) 活動拠点および備品の確保

国際交流サークルにとって、留学生が集まる場所の近くに活動拠点を持つ、ということは非常に重要なことである。留学生は留学生センターなどに集まっているから、現実的にはそれらの建物の近くが好ましい。

箱崎キャンパスでは、留学生センター分室の1階に、九親会と留学生会が共同で使用している部屋がある。となりの集会室で毎週コーヒアワーも開かれている。社会人が中心となっているボランティア組織「そら」のパソコンもすぐ近くに設置されている。

また、我々顧問の教員も同じ建物の2階に教員室を持っているので、連絡は簡単にできる。常に顔を合わすことができるので、お互いに気楽に話をすることができる。

このように、留学生センター分室という場所に、集中的に国際交流関係の組織が集まっている。現在、インターネットとメールが情報交換の中心にはなっているが、実際に顔を会わせるというのは非常に重要である。

現実には、このような場所を確保し続けることは簡単なことではない。留学生センターにお

いても、教員室や教室が不足しているため、このような学生中心の活動に一部屋を与えることについては、毎年のように議論になる。しかし、もし九親会や留学生会が活動拠点を失えば、現在の活動は維持できなくなる。交流システムを作るには非常に時間がかかるものだが、拠点を失えばあっという間に瓦解する。

また、九親会や留学生会が使用するパソコン（およびLAN回線）も大学の予算から出されている。これも筆者が以前申請書を作成した。ホームページやメールシステムを立ち上げ、管理するにはメンバー個人の家のパソコンでは不可能（学生は卒業していく）である。また過去の活動資料や備品などの保管のためにも、サークル室は必要である。

(4) 交流の機会を提供する

実際的な交流の機会を提供することもできる。

例えば、筆者は授業で「日本事情」（学部1、2年生対象）を担当しているが、これは交流授業で実際に留学生と日本人学生が話し、お互いに理解しあうことを目的としている。この授業には、九親会の学生も多数参加している。

この他に、日本語研修コース（6ヶ月日本語集中）の「日本人と話そう」という授業や、日韓共同理工系学部留学生予備教育（6ヶ月）の「日本事情」という授業に、九親会の学生に参加してもらい、同じ学生という立場から留学生に色々とアドバイスをしてもらっている。

また、最近になり、九州大学ムスリム学生会の活動に、九親会が協力する機会がいくつかあった。2005年には、「パキスタン地震救援募金」は留学生と一緒に九親会の学生が福岡の中心街に立ち募金を呼びかけた。2006年10月には「イヴォンヌ・リドリー講演会」をムスリム学生会らが主催し実施したが、これにも九親会が協力

をしている。これらの活動は、ムスリム学生会からの依頼により、筆者の研究室で会議を行い、その場に九親会の学生にも来てもらった。

留学生と日本人学生は、同じキャンパスにいるとか同じクラスにいる、というだけでは親しくなることは難しい。大学院で同じ研究室に所属する学生同士も、皆自分の研究に忙しく、親しくなるのは簡単ではない。

教職員はあらゆる機会を利用して、留学生と日本人学生の交流を促進すべきである。

IV. 終わりに

この原稿は、2006年7月1日に札幌で行われたJAFSA 月例研究会「日本人学生や留学生による国際交流団体の自主活動の促進について」の中で、筆者が行った講演を基にしている。この会では、留学生団体である北海道大学留学生協議会の会長も講演を行った。その中で痛感したのは、大学側のサポートの必要性である。彼らは活動拠点を持たず、交流行事で使う電源を確保することにも苦労していた。

自主的活動とは言え、国際交流が盛んになれば、それは大学にとってもメリットが大きい。また、活動の中で学生達は自ら異文化交流というものを学んでいく。これは教育的なメリットは非常に大きい。その効果を考えるならば、大学側がこれらの活動に対して積極的にサポートを行うことは当然である。

今回、本稿を書くにあたり、先行研究を調べてみたが、ほとんど見あたらなかったことは

「はじめに」に書いた。今後、研究者がもっとこのような活動に興味を持つべきだろう。また、学生交流団体同士のネットワークも広がっていくことが望ましい。福岡には「Inter Link FUKUOKA」があるし、北海道には、SIGN (札幌圏大学国際学生ネットワーク、「Student's」「Interactive」「Global」「Network」の略)のような国際交流サークルの連合体も存在している。このようなネットワーク作りを支援していくのも、国際交流に携わる教職員の仕事の一部である。

留学生センター等の教職員にとって、留学生だけではなく、日本人学生がいる、ということは非常に心強いことである。なぜなら、留学生の本音をよく知っているのは、身近な友人である日本人学生であるからである。

付記 関道子先生 (北海道大学留学生センター) に講演会に招いていただいたことが、本稿をまとめるきっかけとなりました。また、九親会委員長であった舟越瑞枝さんからは多くの情報をいただきました。御礼申し上げます。

【引用文献】

- 箕浦康子 1998 日本人学生と留学生 - 相互理解ためのアクション・リサーチ 平成七年度・平成八年度・平成九年度文部科学研究費補助金研究成果報告書
- 永岡真波 1991 KUIFA・三十年～年刊誌「KUIFA」に見る九親会の利点と問題点 KUIFA (29号・30号合併号)
- 高松 里(執筆) 2006 留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2006年度版 九州大学留学生センター